

太閤の時細川幽齋、息越中守同道し御前へ出けるに、誰やらん近侍のうちより

細き川こそふたつながられ

太閤聞給て、幽齋脇はと被仰候。言下に、

小車の通りし跡に雨ふりて

一、細川幽齋警戒の歌

寄合てよき友

正直や能者ものかき學問者貴人としより餘所をみしひと

寄合てあしき友

喧嘩すき威言廣言うつけもの人のなかゞき公事たくむ人

薬に成もの

朝起や身をはたらかし小食に師親をちかく灸をたやすな

毒に成もの

酩酊にあさいね晝寢遊山すき親に不孝に主人くわんたい

人にほめらるるもの

にほやかに心をしめて氣立よく感^{はんごう}勸なるにしく者はなし

人にくまるゝもの

隨にしてものしり顔にさしで口追従あつて自慢する人

物に成もの

算勘や勇爲武藝に世上がた公義さいかく身を立つるひと

物に成ざるもの

馬鹿ふりき病者述懐わやくものひきこみ思案油斷不氣根

氣高くみゆるもの

大様に慈悲深くしておとなしく物にはまらぬ人ぞ床しき

下劣にみゆるもの

賣買のねだん詰して欲ふかく身持立する人ぞ下卑ぬる

無事に見ゆるもの

何もたゞ心を直にうそいはずで主をうやまひ義をまもる人

一、學而篇脱稿の儀等室鳩巢來狀

四月八日御手書

學而篇廣義草稿、頃日漸にすまし候て、市郎右衛門殿へ遣

候。市郎右衛門殿御寫取候はゞ、貴殿へ可被遣旨申遣候。

扱て手不叶致難儀候。四五字も調候へは手こはり動不申候

故、手をやすめ、調候故、半枚に一日もかゝり申候。其

故延引いたし候。

一、前書に申進候天命の説、御感の段致承知候。天之所賦

爲命と有之候を、一度賦候て以後は、受て性とするとばか

ず御合點被成候は、自得とは深淺違可申候得共、先は端を
開可申候。是より御躰認被成候はゞ、次第に其味深長なる
御覺可有之候。

一、令尹子文の章、御疑問朱書いたし進候。とかく義理は

活看せねばつかへ申物にて候。先頃御越候五嶽石記も、少

々改候て遣候。貴殿文章殊外増進候様に存、珍重不過之候。

一、貴殿此間格別息災に被成候由被申越、さて、老境の

大慶不過之候。彌御攝養專一に存候。外の養生は氣遣無之

候。只に精神を愛養して鬱積せざる様にせらるべく候。餘

り氣をつめ候へば、不覺精氣を損じ申物にて御座候。老夫

も覺有之候。

一、伊藤齋も此間上京、追て家累も京へ引越可申由。多年

其地に罷在仕官を望候所、可爲殘念候。但道學の爲には其

元に居にても不居候ても、損益無之事と存候。

一、千乗の説、小寺殿より其元へ被遣候由に候間、可有御

覽候と存候。とかく千乗を方百里と申ては、算用合不申候。

方百里者十と不申候ては濟不申候。孟子集注十の一と申候

は、方千里の十分一は方百里と、ふと朱子御心得被成候や。

り心得候て、常住天より賦してある事をしらす。父に孝、
君に忠をつとむるは性なり。人心に自然と忠孝をせねば安
んぜず、せよといはぬばかりの物あるを知るべし。是を命
といふ。常に賦してある事をしるべし。然ば性あれば命も
はなれずある故に、性命とはいふなり。其忠孝をせねば安
んぜず、せよといはぬばかりのものは、忠にも不孝も同
事、孝にも不忠も同事なり。是本原一理の所としるべし。
則是より忠をさせ、是より孝をさする程に所以當然の故
とはいふなり。孺子入井を見て悽惻憫隱の心發す。我もい
づれより發すといふ事をしらす、不覺して發するに非ず
や。是天命の常に賦してあるを知べし。老夫も近頃此處を
親切に覺申候。藤太夫殿は最前の説と被仰候由。いまだと
くと御合點不被成やと存候。とかく人物共に常に化育流行
の中にある故に、忠孝仁義等の心常にほろびず。不忠不孝
の人も、不忠不孝をはづる心あるにてしるべし。其故人の
忠をし孝をするも、鳶の飛、魚の躍と同じ事とはいふなり。
此處を藤太夫にもよく御合點の様に御申可有之候。老夫七
十に餘り、やう／＼合點いたし候事を、なにの手間もいら